

Takeaways from AIDS2024 (第 25 回国際エイズ会議から)

<https://www.iasociety.org/blog/takeaways-from-aids-2024>

AIDS2024 は、科学研究のブレイクスルーとコミュニティ主導のイノベーション、アクセス確保を求める熱いアクティビズム、そして効果的な HIV 対策の持続に向けた新たな政治的関与への約束が、人びとを中心に考え、集約されていく会議だった。

プログラムは 40 以上の口頭発表セッション、50 の招待講演、20 のワークショップ、17 のプレカンファレンス、30 のシンポジウム、100 のサテライトセッション、2200 のポスター発表で構成された。グローバルビレッジと国際エイズ学会誌がともに 20 周年を迎え、その祝賀会も行われた。

AIDS 2024 の成果をいくつか紹介しよう。

1. 治癒

HIV 治癒の当事者として知られる 3 人がプレカンファレンスに出席した。このことは AIDS2024 が HIV 治癒のブレイクスルーをもたらす期待をふくらませた。ロンドン患者と呼ばれていたアダム・カスティリエホ氏、デュッセルドルフ患者と呼ばれていたマーク・フランケ氏、シティ・オブ・ホープ患者と呼ばれていたポール・エドモンズ氏が登壇し、それぞれの体験を語った。すべての人に有効な治癒療法の探求を今後も続けていけるよう、研究者や HIV 陽性者を励ますためだった。

さらに、「次のベルリンの患者」とされる 60 歳の男性に関する情報も報告された。HIV から治癒した 7 人目の患者と考えられる人で、2015 年に白血病治療のための幹細胞移植を受け、2018 年に HIV の抗レトロウイルス治療を中止した。5 年以上経過した現在も HIV の寛解状態が続いている。報告にはやや意外な側面もあった。ドナーが HIV 耐性に関連する遺伝因子 CCR5-デルタ 32 変異を二重ではなく一重で持っていたことだ。遺伝子治療に基づく HIV 治療戦略の拡大が期待できる報告といえる。

2. 長期持続型の技術

年 2 回の注射で HIV 感染が予防できるとするギリアド社のレナカパビルについて、UNAIDS のウィニー・ビヤニマ事務局長は「奇跡の予防ツール」と表現した。AIDS 2024 で発表された PURPOSE1 試験の結果によると、レナカパビルの年 2 回注射により、シスジェンダー女性の HIV 感染を 100% 予防することが確認されている。他方、F/TAF または F/TDF を毎日服用した女性では 1% から 2% が HIV に感染していた。

ゲームチェンジャーとなるこの科学的成果に驚きが広がる一方で、活動家たちは「恥を知れ。すべての人にアクセスを」と抗議の声をあげた。

現在の価格設定では、この「奇跡のツール」が南アフリカやウガンダなど低・中所得国にとってあまりに高価なため入手困難となっている。しかも、これらの国では妊婦や若い女性

5000人以上を対象にレナカパビルの臨床試験が実施され、その結果が成果に反映されている。それなのに、という抗議である。AIDS2024における研究発表では、レナカパビルの価格は、研究開発投資や需要の拡大、自発的ライセンス許諾によるジェネリックのレナカパビル大量生産により、1人当たり年間100ドル、その後は35~40ドルにまで下がる可能性があるとの見通しが示されている。

この会議でIAS会長の任期を終え退任するシャロン・ルーウィン博士は閉会式で「医学の進歩は、その薬を必要とする人々がアクセスできる場合にのみ意味を持つ」と指摘した。

長時間作用型の注射薬なら、服薬継続の困難さが克服でき、毎日服薬する必要があるPrEPより受け入れやすくなる。WHOは2年前、安全で効果の高いHIV予防の選択肢として長時間作用型注射薬のカボテグラビル(CAB-LA)を検討するよう各国に呼びかけたが、低所得国や中所得国では、主にコスト面の理由から、この薬の入手はほとんどできていないのが現状だ。

アフリカ大陸で実際にCAB-LAを使用した研究の成果はこれまで、ほとんど報告されてこなかったが、AIDS2024ではこのギャップを埋める重要なエビデンスが発表されている。ウガンダとケニアの農村部で実施されたSEARCH Dynamic Choice HIV予防試験では、参加者の半数以上が、経口PrEPまたはPEPではなく、CAB-LAを選択している。研究者によると、CAB-LAの人気は男女ともに高く、実行可能なことも確認されたという。長期作用型のHIV予防はヨーロッパでも人気の選択肢となっている。男性とセックスをするHIV陰性の男性8642人を対象にしたPROTECT調査では、長期作用型PrEPが利用できるようになれば、使用することに高い関心と意向(最大74%)があることが示されている。

3. リーダーシップ、政策、資金確保

公衆衛生および個人の福祉に対する脅威としてのHIVパンデミックを2030年までに終結に導くというビジョンの実現を妨げる大きな障壁の1つが資金減である。UNAIDSによると、HIV対策に利用できた2023年の国際資金は、ピークだった2013年と比べると約20%減少している。2023年に低・中所得国のHIVプログラムに使えた資金は198億ドルで、2025年の年間必要額より約95億ドルも不足していた。

ドイツのオラフ・ショルツ首相は、HIV対策に対するドイツの強い関与を再確認し、AIDS2024の開会式で、ドイツが『(2030年までに)あらゆるかたちのHIV関連スティグマ・差別を解消するための世界パートナーシップ(グローバルパートナーシップ)』の39番目の署名国になったことを報告した。ミュンヘン市長は会議に先立ち、バイエルン州に薬物使用室の合法化を要請し、会議初日にはミュンヘン市がファストトラックシティになったことを明らかにした。

45カ国以上の370人を超える国会議員による『HIVとエイズに関する世界の議会プラットフォーム』設立宣言には、人びとを中心に据え、HIV感染の終結に向けた政治的支援を再構築することが盛り込まれた。アルゼンチン、ドイツ、英国、ジンバブエの国会議員が集

まり、HIV 対策への政治的関与が低下していることへの懸念が話し合われた。

4. エイズはいまなお続いている

UNAIDS は最新の世界 HIV データを公表した。これまでに私たちが果たした大きな成果を反映し、2010 年時点と比べると、世界の新規 HIV 感染者数は 39%減少した。東部・南部アフリカと中部・西部アフリカではあわせて 56%減となっている。それでも UNAIDS は 2030 年までの 95-95-95 ターゲット達成は困難ではないかとの懸念を示している。

報告書によると、2023 年現在の世界の HIV 陽性者数は 3990 万人に達している（2022 年は 3900 万人）。2023 年の年間新規 HIV 感染者数は約 130 万人で、これは 2025 年ターゲットである 37 万人の 3 倍以上となっている。2023 年には約 63 万人がエイズ関連の病気で亡くなっている。2025 年ターゲットの 25 万人を大きく上回り、世界のどこかで 1 分に 1 人ずつ亡くなっていることになる。95-95-95 ターゲットに対する進捗状況は 86-89-93 にとどまっていた。

このまま何も対応せず、ターゲットを達成できなかった場合のコストも、UNAIDS が主導した研究で明らかにされた。95-95-95 ターゲットが達成できなければ、2021 年から 2050 年の間に 3490 万人が新たに HIV に感染し、1770 万人のエイズ関連死を含む人的コストが発生する。何もしないことによる経済的コストは、2050 年までに低所得国と中所得国で 1 人当たり 8200 ドルを超えるとの試算を示し、「何もしないという選択肢はない」と研究者らは結論付けた。

5. DoxyPrEP と DoxyPEP

AIDS 2024 では、(性行為の前に抗生物質ドキシサイクリンを予防服用する)「DoxyPrEP」という用語が初めて登場し、すでに知られている「DoxyPEP」(ドキシサイクリン曝露後予防)に加わった。

世界各地から参加した研究者が調査結果を報告している。HIV 陽性で梅毒の病歴も持つ「男性とセックスをする男性」を対象にしたカナダの臨床試験では、ドキシサイクリン群はプラセボ群に比べ、梅毒が 79%、クラミジアが 92%、淋病が 68%減少した。また、日本の女性セックスワーカーを対象にした研究では、性感染症の発生率が 100 人年あたり 232.3 から 79.2 に減少している。梅毒の発生率はゼロに減少し、クラミジアはわずかだが有意に減少した。淋病には有意な変化はなかった。

中部・東部・南部・西部アフリカで PrEP を使用している若い女性の STI 感染率は高い。これまでの調査によると、DoxyPEP はシスジェンダーの男性とトランスジェンダーの女性では STI の予防に効果をあげているが、シスジェンダーの女性ではあまり効果が見られていない。副作用や投薬の負担、スティグマ、パートナーの反応に対する恐れなどが使用を妨げているためと考えられる。ケニアの若い女性を対象にした DoxyPEP の服薬状況に関する研究では、服薬の頻度と緊急性を減らし最適な場所とタイミングで服薬できるようにする

ことで、服薬をよりよく支援できるという結論が出ている。

ドキシサイクリンの長期使用による薬剤耐性（AMR）の可能性には依然、大きな懸念が残っている。AMRに関し、さらにエビデンスを得るには、大規模かつ継続的なサーベイランスが不可欠になる。

6. スティグマ、差別、犯罪化

HIV 対策を阻むこの大きな障壁は除かれなまま残っている。それどころか、HIV 陽性者 7 万 0109 人を含むアフリカ 33 カ国の 84 万 2169 人のデータを分析したところ、HIV ケアのあらゆる段階で関与の低下がスティグマと関連していることが分かった。過去 1 年間に HIV 検査数が低かったところで、研究者が関連する 3 つのスティグマ指標を分析したところ、HIV 陽性者に対し差別的態度がある（36%の人が報告）、HIV 陽性者と付き合うことが恥ずかしい（18%）、HIV に関しスティグマがある（79%）という結果だった。コミュニティレベルで差別的な態度が 50%増加すると、HIV 陽性者が ART を受ける可能性は 17%低下し、ウイルス量の抑制を果たす人が 15%減少することも報告された。ヨーロッパ各地の医療従事者を対象にした調査では、1 万 8430 人の半数以上が、HIV 陽性者へのケア提供に不安を感じていた。また、東欧・中央アジア地域では HIV 感染の犯罪化と法制化に伴うスティグマについて調べたところ、回答した 8128 人のほぼ半数が医療現場でスティグマを経験していた。

LGBTQ の人たちの関係を法律で犯罪とみなしているアフリカの国々では、キーポピュレーションの人たちが HIV サービスを受けることが困難になっている。ウガンダでは、1992 年当時 18%だった成人の HIV 感染率が 2020 年には 5.2%に低下する大きな成果を上げてきた。ところが最近の反同性愛法の強化により、その成果も大きく後退する恐れが出ている。コミュニティでは、差別、暴力、逮捕、「集団リンチ」などが見られ、LGBTQ の人たちに治療やケアを提供することを恐れる医療サービス提供者も急増している。政府と他の機関を含めた対応チームが作られ、法律から受ける影響に対応できるよう、LGBTQ の人たちに配慮したサービスの維持に向けたサービス提供者向け研修、キーポピュレーションのコミュニティによるケアを可能にするためのフォローアップとピアサポートも実施している。

ガーナでは、議会が反同性愛法案を承認したことから、医療従事者が地域に密着して取り組む総合的戦略を対応策として採用し、男性同性愛者が HIV サービスを受けられるようにしている。その戦略には、ピアエデュケーターのアウトリーチをグループ単位から一対一の目立たない対応に転換すること、検査と治療を自宅や安全な場所で受けられるようにすること、ART と PrEP の複数月処方推進しクリニックへの通院回数を減らすことなどが含まれている。

こうした法律が HIV 対策のプログラムに与える影響は極めて大きいと研究者らは指摘し、高いレベルの利害関係者の支援を求めている。